

# 史跡能島城跡のき損と植生

田 中 謙

(今治市教育委員会)

## はじめに

この発表では、史跡能島城跡の保存を脅かす原因の一つとして近年認識された「植生」について、まずは、その被害の現状を紹介します。そして、それを克服し、さらに活用へとつなげるべく構想中の計画についてその概要を報告します。

## 1. 能島城の概要

さて、能島城は、瀬戸内海のほぼ中央部、芸予諸島に位置する能島、鯛崎島の二つの小島全体を城郭化した全国的にも珍しい形態の城です。その立地から「海城」あるいは「島城」などによく呼ばれるこの能島城は、芸予諸島の因島・能島・来島にそれぞれ本拠をいた三島村上水軍のうち、“日本最大の海賊”（『フロイス日本史』）と称された能島村上水軍の活動拠点として南北朝時代から戦国時代にかけて利用されました。「典型的な海城の遺跡で、内海をめぐる歴史や城郭研究の上で貴重な遺跡」として、昭和 28 年に国指定史跡になっています。

従来、能島城の役割は、水軍（海軍、倭寇）の根拠地、瀬戸内海交通のシンボリック的存在、出城的役割で居住性がなかった、などと評価されてきましたが、平成 15 年度から始まった考古学的な調査により、その認識が改められようとしています。



写真 1 能島城跡遠景（カレイ山展望公園（西）から撮影）

「能島城は、戦時における防御施設としての機能以上に、平時の海上における経済活動の拠点としての機能を重視した城。またそれに従事した人々の日常生活の場であるとともに、儀礼や饗宴などを行う非日常的な空間を併せ持った城である」。これが、発掘調査成果をもとに、私たちが主張する最新の能島城の評価です。

このように、村上水軍の歴史・文化を紐解く上で、欠かすことのできないこの能島城は、日本最大の海事都市を標榜する今治市の礎であり、大切な地域資源です。また、繰り返しになりますが、全国的に見てもこのようなタイプの城郭は珍しく、さらに史跡整備に伴って全域におよぶ発掘調査が実施された海城は能島城がほぼ唯一であることから、日本の城郭研究史に名を刻む重要な遺跡であると自負しています。

しかしながら、これから述べるような原因により、その保存が脅かされています。このまま放置すれば、能島城の価値を損ねずに良好な状態で後世に伝えていくことはできません。そこで、能島城の適切な保存と活用に向けた計画が今進行しているのです。

## 2. 能島城の三大き損原因

能島城の保存を脅かす原因は、本題の植生だけではありません。最悪の場合は、瞬時にして史跡の価値を奪う恐れがある負の外的因子が存在しています。

第一に、雨水の流出による、表面浸食・表層破壊です。とくに切岸を連想させる海岸に面した急峻な崖の被害は深刻で、その対処が必要とされています。そこで平成 20 年度に雨水排水基本計画を策定し、将来の郭の整備とともに施工できるように、計画が練られています。

第二に、激しい潮流と波浪による海岸部の浸食と崩壊です。最大 10 ノット（時速約 18 km）にもなる潮流が 6 時間おきにその流れを変え、長い年月をかけて岩礁を少しずつ浸食していきます。また、台風時の高潮は、斜面の裾をえぐり、オーバーハング地形になっていきます。斜面裾の浸食と、第一の要因である雨水流出とが相まって、斜面の大崩壊を招くのです。能島北側の船だまりなどでその被害が確認されたため、平成 18~20 年度に整備工事を実施しました。

干満、高潮は自然現象なので、やむを得ない部分もありますが、新たな問題として、漁船や貨物船などが通過する際に発生する波（航跡波）の影響が挙げられます。船の高速化や大型化が、波高を増大させているのです。これについても、波が収斂される湾部については、消波施設などを備えて対処していますが、すべてを保護するには莫大な費用と、何よりも自然景観を損なう恐れがあり、とても難しい問題です。最低限の措置として、部分的な整備工事の実施と、海岸部に残る遺構の測量調査を実施して記録化を行っています。

最後に植生。具体的には、樹木の根による遺構・遺物の破壊です。これについては、次章で詳しく述べます。

このほかにも、少なからず来島者の影響があります。花見客、釣り客によるゴミの廃棄や火気使用などです。注意喚起はしているのですが、離島がゆえに管理が行き届かず、徹底がなされていません。さらに、船の接岸の衝撃で、栈橋や護岸石積の一部が崩落した例が過去に何度もありました。幸いなことに、後世に造った便益施設の損傷だけで、史跡の本質的な価値を損なうことはありませんでしたが、保存を脅かす危険性があることには変わりはありません。

### 3. 植生の現状と被害

#### (1) 能島城の植生

昭和 10 年頃には、大木はほとんどなく、郭の段がはっきりと認識できていたようです（写真 3）。ところが、現在は城跡には見えず（写真 1）、ただの小島と言われても仕方ありません。

植生の現状の把握と、今後の管理方法を考えるために、まずは、能島城の簡易植生調査を平成 20 年に愛媛大学の江崎次男先生と研究室生の協力のもと実施しました（図 1）。能島城の植生は 14 ブロックに分けられ、34 種の樹木が確認されました。そのうち、ソメイヨシノ（100 本以上）と数本のサンゴジュが人工植栽になります。島の西側から南側にかけてはクヌギ群落で、東側海岸沿いと斜面と北側にはエノキやムクノキなどの高木が見られます。海岸に面した急峻な斜面は、11 ブロックを除いて、高木によって覆われていることがわかり、大型台風の直撃でこれらが倒れる危険性を考えると恐ろしくなります。

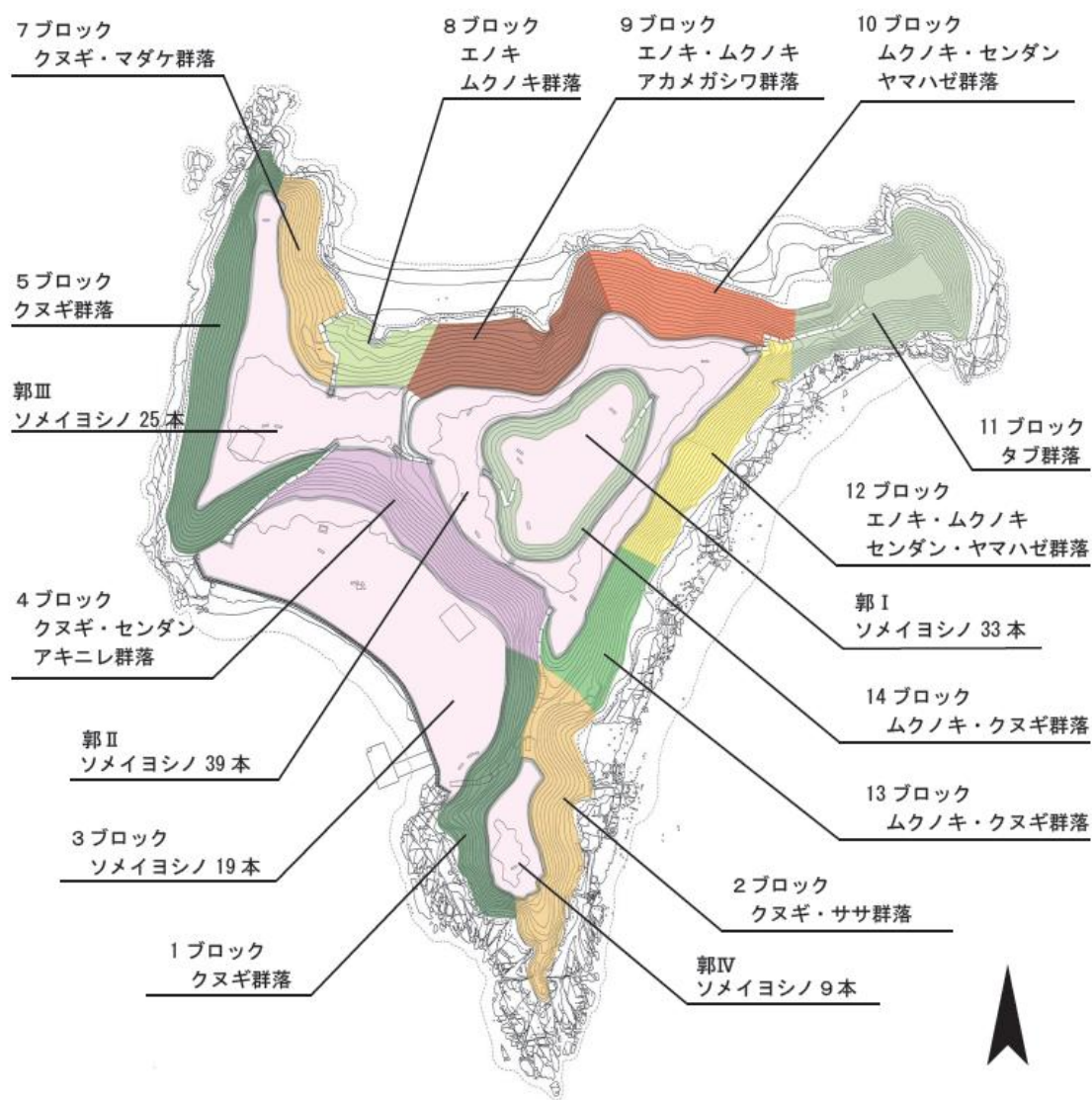


図 1 能島の植生



写真 2 樹木の根による遺構・遺物の破壊

## (2) 遺構に与える影響の調査結果

能島城の発掘調査の目的の一つに、樹木の根が遺構に与える影響の調査を設定しています。このこと自体大変珍しいですが、能島城ではその必要性があったのです。

調査の方法は、抜根をせずに残したまま発掘を行います。根の行方を追うことで、その影響が把握できるのです。調査の結果、樹木の根が遺構を破壊していることは写真 2 の通り一目瞭然。ソメイヨシノの根が岩盤上を這い、浅い土坑に納められていた、土師器皿 28 点、銭貨 82 点の上や、折り重なる中を伸長し、それらを破壊し、元の位置を動かしていました。この遺構は、中世の地鎮祭の痕跡と考えられていますが、どのように皿や銭を配置していたのか、詳細がわからなくなっています。約 500 年間残ってきた遺構が、昭和の時代に植樹されたソメイヨシノによって破壊されてしまったのです。

そのほかにも、根は柔らかい柱穴の埋土や、脆い岩盤の亀裂には容赦なく入り込んで、遺構を破壊していきます。また、斜面を覆い尽くしたクヌギの根は、表土と岩盤の間や岩盤の亀裂に入り込み、斜面崩壊を招いているのと同時に、台風時には岩盤を抱いたまま倒れ、遺跡を大きく破壊する危険性があります。植生が遺構に与える影響の調査成果は、現地説明会やこのようなシンポジウムなどを通じて、積極的に内外に発信しています。全国の遺跡で見られる現象と推測され、問題意識を共有する必要があるではないかと思ったからです。

## (3) ソメイヨシノをめぐる問題

再度述べますが、昭和 10 年頃には、現在のような大木はなく、郭の段が確認できています

(写真3)。ソメイヨシノは昭和6年頃に植樹されたということですから、この写真の郭上に見えている低木が、ソメイヨシノの若木なのでしょう。

当時はこれらが生長して直接的に遺構を壊す原因になり、間接的にはその落葉によって土壌が肥え、やがてクヌギなどの高木が繁茂する基盤となることなど知る由もなかったはずです。そして、ソメイヨシノの生長とともに、能島城が守るべき歴史的遺産であると



写真3 昭和10年頃の能島城（北東、鶺鴒島から撮影）

いう地域住民の意識は確実に薄れていきました。能島の代名詞は「桜の島」となり、ソメイヨシノの植樹が続けられることとなります。全盛期には200本以上が花を咲かせ、島全体がピンク一色で盛り上がって見えた、と地域の方は熱く語ります。あの姿に戻したい、とも……。現在でも4月上旬の土・日限定で「能島の花見」が開催され、その2日間だけは「能島渡し」が運航され、多い年では1000人余りの来島者があります。「能島の桜は有名だけど、城跡とは知らなかった。」そんな声をいまだに耳にすることがあります。悲しいですが、これが現実なのです。

調査によって明らかになった以上、植生が史跡を壊す原因の一つである、という事実に目を向けて、植生環境の改善を行わなければなりません。次にその取り組み例を少し紹介します。

#### 4. 植生環境の改善に向けて

まず急がなければならないのは、遺構を破壊する恐れのある樹木を伐採することです。とくに倒れそうな木や、古木、枯木を優先し、ここ2～3年かけてできる限り撤去しました。

遺構の保存に及ぼす影響が確認されたソメイヨシノについては、前述の通り、地域住民の思い入れが強いため、コンセンサス（合意）を得ながら慎重に対処していかなければいけません。能島城は、瀬戸内海国立公園特別地域内に位置していますので、管理を行う環境省や、桜の名所を謳う観光サイドの関係機関との協議も必要になります。ソメイヨシノの根が遺跡を壊す、という認識は少しずつ広がっている感はありますが、その浸透にはまだ時間がかかります。

既存木については、直ちに伐採するという手段もありますが、すべてが「てんぐ巣病」などの病気にかかっているため、寿命を全うした順に撤去させてもらうというのも一つの手段ではないかと考えています。ただし、遺構の保存を脅かす深刻な影響が証明された以上、新たな植樹を認めることはできません。

植生が史跡に与えるマイナスの影響は、物理的な遺構の破壊だけではありません。先ほどから述べているように、城跡としての景観を損なっているということにも大きな問題があります。なぜ景観の整備が必要なのでしょう。それは、能島城の価値を正しく理解してもらうために、外見の整備が重要な役割を果たすと考えられるからです。城跡だと認識されなければ、それが後世に伝えるべき大切な歴史的遺産であるという意識を醸成するのは難しいでしょう。

しかしながら、危険木や枯木の撤去によって少しずつ樹木の整理は進んでいるものの、外見上はまだ城跡には見えません。冬になれば葉が落ちて、かろうじて城跡らしく見えるスポットもありますが（写真3）、予備知識がなければ城跡とは認識できないでしょう。植生の適切な管理は、保存を脅かす物理的な影響の排除がまず大前提ですが、それと同時に、城跡であることを顕在化されるための景観への配慮が必要となるのです

そこで、緊急的な伐採が今年度ではほぼ完了しますので、次の段階として、海岸に面した急斜面の高木の伐採を計画しています。来年度から3か年で、能島の1/3ずつ、大規模な伐採作業に着手する予定です。まずは、地域住民や観光客が目にする事の多い能島西側（1・4・5ブロック）から開始し、その効果を検証していただきたいと思っています。能島西側は、クヌギ・センダン群落で、郭を取り囲む壁のように高く生長しています。伐採、撤去後は、基本的にはそのまま放置して低木の生育を待ちますが、必要に応じて植栽を行いたいと考えています。

このように、保存と活用の両観点から植生を管理することで、保存を脅かす原因の排除と同時に、城跡として認識できるような景観整備の実現を目指しています。

## おわりに

植生のすべてが史跡にマイナスの影響を与えるというわけではなく、逆に地盤強化や景観整備にプラスの効果を与えるのも植生整備に期待される役割です。本シンポジウムの趣旨でもありますように、史跡を現代社会に活かしながら、良好な状態で後世に守り伝えていくために、自然環境との融和を図る必要があります。日々、最適な方法を模索し続けています。

ただ、ハードな整備工事だけを進めれば良いのではなく、同時に、能島城の持つ歴史的価値を正しく理解してもらうための情報発信と、その前提となる調査研究が重要だということを痛感します。能島城が大切なものだという意識が地域で共有されれば、少なくとも人為的な原因で保存が脅かされるということは無くなっていくのではないのでしょうか。



写真4 冬の能島城遠景。城跡に見えますか？（南西方向、やや高所から撮影）